

韓国民俗学は「当たり前」を捉えうるか

—韓国国立民俗博物館の二つの民俗誌（2007～14年）を中心に—

KIM Hyeonjeong
金賢貞

はじめに

いまを生きる普通の人々の「当たり前」に照射する民俗学のあり方や可能性を議論するため、日中韓の民俗学者たちが一堂に会して行われた日本民俗学会 2014 国際シンポジウム「“当たり前”を問う！—日中韓・高層集合住宅の暮らし方とその生活世界—」では、「サルリムサリ」という韓国語が引合いに出された。コーディネーターの岩本によれば、「日常生活や生活財のすべて」をさすサルリムサリは「実存的な‘生活世界’そのもの」であり、その調査を実施してきた韓国の国立民俗博物館（以下「韓国民博」）はその調査報告書＝「民俗誌」の刊行と共に、調査データのデジタル・アーカイブ化を進めている〔岩本 2015：6〕¹。韓国民博によるサルリムサリ調査は、「日常生活」「生活世界」に対する疑問を通して「当たり前」を「問う」試みという評価であり、『『伝承』という連続性の神話に基づいた』『保守的な韓国民俗学』〔南 2009：5-6〕という批判に照らし合わせると、その変化には目を見張るものがある。ただ、この調査については、丁〔2015〕による簡単な補足説明はあったものの、その詳細、つまり、調査実施の目的・背景、具体的な内容、韓国民俗学における位置付けなどに対する検討は行われていない。詳しくは後述するが、このサルリムサリ調査は、地域社会の民俗を総合的に調べる地域民俗調査と並行して行われ、成果としての民俗誌も 2 冊セットの形で刊行されてきたため、その地域民俗調査や民俗誌についての検討を抜きにしてサルリムサリ調査の意味や成果を評価することは困難である。本稿の第一の目的は、以上の問題に答えることにある。

本稿では、まず、約 10 年前から始まったサルリムサリ調査を含む一連の民俗調査の新規性を理解するため、韓国民博によるそれまでの民俗調査や調査報告書を中心に検討する。次に、近年の新しい一連の民俗調査が可能だった背景を韓国民博の活動内容の変化から探る。その上で、サルリムサリ調査を含む一連の民俗調査や 22 冊の民俗誌の中身＝記述から見出される特徴を中心に論じる。最後に、新たな試みとしての以上の一連の民俗調査に見られる認識論・方法論上の変化が昨今の韓国民俗学といかに連動しているか、重要な研究成果を、隣接する学問分野のものを含めて取り上げ、議論してみたい。

1. 過去に向かうまなざし—韓国国立民俗博物館と民俗調査—

ソウル市内に所在する韓国民博（「文化体育観光部」傘下）は、1946 年 4 月に「国立民族博物館」として開館して以来、「文化財管理局」管轄の「韓国民俗博物館」（1975）・「国立中央博物館」管轄の「国立民俗博物館」（1979）への改称・改組や、現在地への移転（1993）などを経て現在に至っている。2014 年度の年間来館者数は 3,271,017 人、経費規模は 22,855,369 千ウォン（10 ウォン＝約 1 円）である²。館の運営は「民俗企画課」「渉外教育課」「展示運営課」「民俗研究課」

「遺物科学科」「子供博物館課」に分掌されており、博物館資料の専門的・学術的調査・研究は民俗研究課が担当する。民俗研究課を中心に約13億ウォン規模〔国立民俗博物館2014b：2〕で行われる同館の調査・研究は、現在地への移転後に本格化した。

「最優先すべきだったことは博物館だけの研究団の力で民俗調査を行い、その報告書を刊行すること」〔国立民俗博物館編1996：333〕だと認識した韓国民博は、1993年から2002年までの10年間、「チャンスンとソッテ信仰」「伝統民家」「在来市場」「伝統生活史（漁村）」「通過儀礼」「伝統生業技術（農業）」「洞祭堂」「歳時風俗」「巫俗信仰」「墓祭」「在外同胞生活文化」などをテーマにした民俗調査を、基本的には「道」（日本の「県」に相当）単位で実施し〔年報1994～2003〕³、全22冊の調査報告書を出した〔年報2003：140〕。これらの調査と調査報告書からは、次の三つの特徴が見出せる。

まず、調査は1回につき1～10日間、総じて1～7回に亘って行われた。つまり、基本的な調査期間は10日以下であり、特別な民俗行事の取材や補足などを目的とした調査が断続的に実施された。

次は、衰退・消滅の危機に瀕した韓（国）民族の基層文化たる民俗を採取調査の対象に指定したことである。例えば、「江原道地域在来市場調査」（1993）は、「都市化・産業化の進展に伴い、従来の商工業の体系が瓦解し、在来の市場が次第に姿を消す」〔年報1994：61〕しているため、「古い歴史や土台の基で綿々と続いてきた民俗文化の器」である市場を調査対象に据えた。また、「韓国の伝統民俗信仰の一端を究明」〔年報1994：60〕すべく始まった「全北地域チャンスンとソッテ信仰調査」（1993）も類似した問題認識から出発している。このような見方はその後も続き、「急速に消えていく」〔年報1998：59〕洞祭堂、「我が国の伝統文化の基」〔年報1999：79〕たる巫俗信仰などが次々と調査項目として見出されていった。このような民俗調査のあり方は、当時の韓国民博が、「都市化・産業化・西欧化」によって「危機的時代」に置かれた「民族固有の生活風俗、習俗」「暮らしの足跡」〔年報1994：3〕である「伝統民俗文化」の「発掘と保存・伝承」〔年報1994：10〕に民俗調査の目的を設定したことを示す。

最後に、韓国以外での民俗調査も実施されたが、館外の研究者団体への委託によるものであった。1996年から始まった「在外同胞生活文化調査」は韓国文化人類学会に委託され、中国・ウズベキスタン・カザフスタン・ロシア・日本で当該調査が行われた⁴。ただ、国外に広がった視線の先にあったのは、「我が文化（韓民族の文化）がいかに変異」（引用中括弧筆者、以下同）、「同化」〔国立民俗博物館1997：85〕しているかを調べるという、民族文化の由来・正統性への希求であった。

要するに、韓国民博は1993年から10年間、念願だった博物館独自の民俗調査を体系的かつ本格的に展開することができ、さらに、地域別・項目（item）別の民俗調査報告書を蓄積した⁵。上述した韓国民博による民俗調査の目的は、近代以降の社会変動の中で衰退・滅失の恐れのある民俗＝「韓民族」の「基層文化」を見つけ、採集・記録・保存し、究極的には展示することにあった。これは、「我が民族の基層的生活文化」〔民俗学会編1999（1994）：31〕を研究する学問が「韓国民俗学」だという当時の学界内の支配的な認識を示している。その一方で、「いまだに僻村の原始的な残存文化だけを民俗に規定」し、その中で暮らす人々の「実際生活そのものには寸毫も関心を示さな」〔金編著1984：43〕い「過去学」〔金編著1984：44〕のまなざしに対する批判があったにも拘らず、「博物館」というレゾンデトール（raison

d' être) ゆえに、「残存文化」＝「基層文化」の救済に邁進したこともうかがい知れる。

2. 「現在」の生活文化に着目する—韓国国立民俗博物館と国際交流—

2003年以降、民俗調査を含む韓国民博の活動から明らかなのは、「民俗」に対する従来の過去志向的・固定的な解釈から現在志向的・流動的なものへシフトが起こったことである。民俗調査の場合、2003年以後も「歳時風俗」「通過儀礼」「建築儀礼」「墓祭」など従来の項目に合わせて行われたが、その中身に変化が見られる。例えば、1997年に始まったものを引き継ぎつつ、『韓国歳時風俗事典』の編纂及び写真アーカイブの構築に向けて2001年から進められた「歳時風俗調査」が挙げられる〔年報2004：62〕。特記すべきなのは、韓国の従来の民俗学概説書や民俗調査報告書には含まれなかったキリスト教系のクリスマス、普信閣⁶での除夜の鐘、韓国東海岸で催される日の出行事（以上は2003年調査）、西暦正月（2004）、学校の卒業式・入学式（2005）などの「現代歳時風俗」〔年報2005：70〕が取り上げられたことである。ただ、端午などのいわゆる伝統的な民俗の調査は学芸士などの研究職が担当したのに対し〔年報2004：64〕、現代歳時風俗の調査には写真家のみ派遣されたことは注意に値する〔年報2004：67、年報2006：80〕⁷。「現代歳時風俗」を民俗学者が調査しなかったのは、毎年容易に見られる当たり前の催し物で、民俗学の専門家がわざわざ調べなくてもいいという判断がなされたためだろう。とはいえ、近代以降に外来文化（宗教）として移入し、商業主義・マスメディア・社会制度などの影響の中で作られ、いまの人々に馴染み深い現代の文化を「韓国」の「民俗」として取り上げたことの意味は大きい⁸。

韓国民博の「民俗」に対するこのような認識論的変化の背景には、関連する海外の研究者・博物館との交流があったと考えられる⁹。まず、日本の国立民族学博物館（以下「日本民博」）との展示交流が挙げられる。韓国民博は2000年に韓国の「巫俗文化」「服飾文化」という、いかなれば典型的な民俗をテーマに日韓文化交流展を企画した。しかし、そのカウンター・パートナーを引き受けた日本民博が現在の生活文化を再提案し、韓国民博もそれに合意したので、2002年に両館では「生活文化展」を開催するに至った〔千2002：7-8〕。当時、学芸研究官として参加した千¹⁰によると、この日韓交流展は二つの意義を有する。

まず、国内を対象とする「伝統生活文化史博物館」としての韓国民博が、「コンテクスト」に基づいた「生活文化」を重視する「異文化展示」のノウハウを獲得したこと、次に、「リアルタイムの生活文化」を対象にした「現在の調査研究・遺物収集・展示」を進める重要なきっかけになったことである〔千2002：20-21〕（引用中傍点筆者・以下同）。要するに、「民俗」＝「国立歴史民俗博物館」、「異（民族）文化」＝「日本民博」に区別された日本とは違い、異文化の調査研究・資料収集・展示を担当する博物館のない韓国では韓国民博がそれを担当するしかなく、そのための経験を蓄積したことや、過去の民俗によって過去の生活文化しか展示＝再構成できなかった従来の韓国民博のアプローチが、眼前のいまに広がってきたことを示している。

以後、韓国民博は外国の博物館や関連研究者たちとの交流を積極的に進める。最も代表的な例が、韓国民博の主催した「2004 ソウル世界博物館大会 国際世界生活文化博物館委員会」（2004 Seoul ICOM-ICME）と、それを協議するために「国際博物館会議」（International

Council of Museums) 内の「民族学の博物館・コレクション国際委員会」(International Committee for Museums and Collections of Ethnography) ¹¹ の会長らを招待した一連の活動である ¹²。さらに、2005 年には、米ピーボディ・エセックス博物館 (The Peabody Essex Museum) のダン・モンロー (Dan Monroe) 館長が来館し、「民族学博物館の未来」(The Future of Ethnology Museums) と題した講演を行った。この講演の中でダン・モンローは、「伝統文化」(traditional culture) という考え方を「規定する」(pin down) ことは至難の業であり、文化の「混濁化」(hybridization) が急速かつ広範囲に進むいま [Monroe 2005:32]、「歴史的過去や文化的伝統のみに傾注」する民族学博物館は、現在とのつながりを失いかねないと主張した [Monroe 2005:33]。そして、このような見解が韓国民博の現在への関心を一層強めたと考えられる ¹³。

3. 「サルリムサリ民俗誌」の誕生

韓国民博は 2006 年から 2015 年まで「地域民俗文化の年」(以下「地域民俗の年」) と名付けられた事業を進めてきた。本稿がこの事業に着目する理由は、先述した如く、これまで韓国民俗学の中で試みられなかった「サルリムサリ」を対象に新しい民俗調査がこの事業の一環として継続的に行われ、その成果として新たな「民俗誌」(ethnography) ¹⁴ が着実に生み出されてきたからである。

「急激な産業化・都市化によって消えつつある伝統的な暮らしの形」の「保存」と共に、その「観光資源化」を目標に掲げた地域民俗の年事業は、韓国民博と地方自治体(道)との緊密な連携の下、当該年度の前年に「民俗資源を発掘」するための学術調査を行い、その結果に基づいた展示・学術大会・教育・催し物などを翌年＝地域民俗の年に実施するというものである [年報 2009:29]。ここから読み取れるのは、産業化・都市化から守るべき民俗という本質主義的な認識と、「農山漁村を中心に民間で一定期間伝承してきた文化」＝「伝統」[韓 2015:135] としての民俗を、韓国民博の研究者たちが主導的に採集し、その価値・意味を地方自治体や住民に知ってもらいつつ、活用＝資源化に供するという啓蒙的・実践的姿勢である。しかし実際は、地域経済の活性化のための具体案を期待した地方自治体と、学術調査に大半の予算を投じた韓国民博との間に隔たりがあったと考えられる [李 2015、許 2015] ¹⁵。

地域民俗の年事業の一環として行われた民俗調査の結果は、2 種類の民俗誌にまとめられてきた。本稿では、特定地域を総合的に調査・記述したものを「地域民俗誌」、特定家庭の「サルリムサリ」を総合的に調査・記述したものを「サルリムサリ民俗誌」として区別したい。2007 年から 14 年までの 8 年間刊行された地域民俗誌は 16 冊、サルリムサリ民俗誌は 15 冊あり、2007 年以外は年 2 冊ずつ出されてきた(表 1) ¹⁶。加えて、2008 年以降は「都市民俗調査」と称する別の事業が毎年実施されるようになり、それに基づく「地域民俗誌」「サルリムサリ民俗誌」(各 7 冊) も上記の 8 年間に含まれている(表 1) ¹⁷。

本章では、韓国の民俗誌として新しい「サルリムサリ民俗誌」がいかに生まれ ¹⁸、その特徴は何かを検討していくが、その前にそもそも、「サルリムサリ」とは何か、改めて確認しておきたい。韓国語の「サルリムサリ」は、「サルリム」という名詞に「-サリ」という「-住まい」

「暮らし」を意味する接尾語が付いてできた言葉であり、「サルリムをもって暮らすこと」「匙・お椀・布団などサルリムに用いられる所帯道具」を意味する[国立国語院 online]。さらに、「サルリム」は「一家をなして暮らすこと」「暮らし向きや家計の程度」「家の中で主に使われる所帯道具」[国立国語院 online]などと定義されるので、暮らしに関わるモノだけでなく、人間の暮らしそのものを表す言葉として用いられる。

韓国民博刊行の民俗誌名をよく調べてみると(表1)、「サルリムサリ」という用語は2008年から見出され【②、③、(⑤)】、07年には「生活財」が用いられた【①】。また、「生活財」の初見は06年の『行政中心複合都市建設予定地域人類・民俗分野文化遺産地表調査報告書 忠南燕岐郡錦南面盤谷里 Kim Myong-ho 氏宅の生活財調査報告書』(以下「盤谷里生活財調査報告書」)である。実は、「サルリムサリ」は「生活財」にとって代えられた用語なのである。

盤谷里生活財調査報告書は、中央行政機関の地方移転計画に伴う開発予定地域の「伝統文化」を記録・保存するために韓国民博が主導的に実施した人類学・民俗学的調査結果の一部である¹⁹。生活財調査を率いた金によると、この盤谷里調査の手法は、2002年前後の日本民博との交流展示をきっかけに韓国民博に紹介された日本の生活財調査に触発されている[金2006:18-19]²⁰。つまり、ある空間内の「植物を網羅的に調べあげ、植生図を作成」する森林生態学に倣って一家庭内の「生活財の保有・配置状況」「家庭景観」を調べた「生活財生態学」[商品科学研究所+CDI1993:4]や、「もの」は「かたる」という視点に立った佐藤浩司の生活財調査[佐藤2002:104]、言い換えれば、一家庭内にある全てのモノに対して極めてモノ中心のかつ現在の的な実態把握に主眼を置いた調査方法が導入されたのである。したがって、盤谷里生活財調査は「人間が暮らしを営む過程で保有する各種生活用品の総体」[金2006:18]を生活財と規定した上で、その「総体的紹介」[金2006:20]を目的に据えた。しかし、翌年からは、生活財調査という基本的な枠組みは受け継がれつつも、調査実施・民俗誌記述の目的・方法は次第に変わる。紙幅の都合上、全22冊(2007~14)のサルリムサリ民俗誌を細かく議論することはできない。ということで、以下では、日本の生活財調査に大きく影響された韓国民博によるサルリムサリ調査の認識論・方法論上の特徴を二つ挙げ、サルリムサリ調査・民俗誌のあり方や露呈された問題を論じてみたい。

第一に、サルリムサリ=生活財の「補助資料」化である。つまり、日本の生活財調査に見られた「モノ中心的」「現在の」視点からの変化である。

もともと韓国民俗学にはなかった「生活財」調査という新しい考え方・手法は、韓国民博の調査者たちを相当混乱させたと推察される。中心概念のネーミングだけでなく²¹、「地獄のような」【(⑤)、13頁】調査²²の割に、その民俗学的意味や価値は不明瞭だったからである。そこで見出されたのが「ライフヒストリー」との組み合わせである。例えば、盤谷里生活財調査報告書で「生活財」は、そこにあるだけで注目すべき調査対象と捉えられた。しかし、①からは、目の前にあっても「今は使われない」ため、「生活物品ともいえない」モノでも、その所有者の「ライフヒストリー」との関係から解釈すれば有意義だという捉え方に変わる【①、12頁】。つまり、所有者の「人生のある時点を想起」させる「物質的証拠」【①、20頁】、「ライフヒストリー」を理解するための「補助的資料」【①、12頁】に位置付けられたのである。このような認識の変化は、サルリムサリ民俗誌の構成にはっきりと表れ、家の間取りや建物別に章立てされた盤谷里生活財調査報告書以後のサルリムサリ民俗誌では、家系図・家族紹介、調査対象夫婦(或いは片方だけ)のライフヒス

トリーなどを取り上げる章が必ず組み込まれるようになった。要するに、サルリムサリ民俗誌におけるモノは、それ自体が「かたる」〔佐藤 2002〕のではなく、語られるべきと捉えられ、ライフヒストリーとの関係性を基準に価値付けされる受け身の対象になった。

さらに、ライフヒストリー研究のための補助資料としてのサルリムサリには、資料としての「客観性」【⑱、14 頁】が強く求められるようになった。例えば、⑪の調査者は調査に必要なモノの購入時期などの情報²³を所有者が正しく覚えていない場合が多く、所有者＝語り手と調査者ともにイライラしたことに触れている【⑪、13 頁】。そのため、「目の覚めるよう」【②、36 頁】な日記などの記録が見つかり、調査者は喜び、さらには、そのような記録を有するか否かが被調査家庭を決める基準になることもあった【②、⑥、⑱】。つまり、ライフヒストリーという人の曖昧な記憶に頼るしかない研究の科学性を、モノという物質の客観性から補填しようとする思考の表れだといえよう。

第二に、一家庭のサルリムサリから、地域・国家の歴史・文化を読み取ろうとする意図性である。サルリムサリ調査の対象家庭を選ぶことはこの調査の質を左右すると考えられ、慎重に行われた。興味深いのは、最初は、現居住地域＝地域民俗調査の対象地域で生まれ育った地付き（「土着民」「トバギ」）の夫婦で、古い家屋・サルリムサリを有する家庭という、ある意味ゆるい基準だったのが〔金 2006：21〕【①、13 頁、②、17 頁】²⁴、「居住家屋が比較的地域の伝統的・普遍的な家屋構造を有する家」「家具や電子製品などサルリムサリが平均程度の家」「家族構成員の数が適正な世帯」「村の隣人関係が円満な家」【③、14 頁】、「生業が農業の家」²⁵、「村で栽培する一般的な作物を栽培」【⑭、14 頁】する家、「一定規模の生業（農業）に従事する家」「子供と持続的に交流している家」【⑳、26 頁】などと細分化しつつも、実は、「比較的」「伝統的」「平均程度」「適正」「一定規模」といった調査者側の設定する曖昧な基準を並べるようになったのである。またこれは、「村の一般的な暮らしを見せてくれる」【⑳、25 頁】家庭という、当該地域における被調査家庭の曖昧な「普遍的代表性」【⑭、14 頁、⑳、25 頁】の重視を意味する。つまり、一家庭のサルリムサリは、所有者個人・その家族を超えて、家族の居住する地域や、ナショナル・レベルで地域を規定する国家としての韓国の文化に対する解釈につながるものが求められたのである【⑪、14 頁】。このような「代表性」「典型性」へのこだわりは、既に農業が「代表的な生業ではな」くなり、「商業やサービス業が主」な地域であっても「農業」を営む家庭を意図して選んだり【⑨、15 頁】、27 世帯ある村に一人暮らしの老人世帯数が調査当時 15 もあったのに、「夫婦」【⑱、12 頁】世帯を選別するといった、リアリティを不可視にする民俗学的排除のバイアスを働かせることになってしまった²⁶。

この問題に関連してもう一つ注意すべき点がある。それは、被調査家庭のサルリムサリを「地域」「国家」の文化・歴史の「標本」【③、12 頁】と捉えるだけでなく、そのようなサルリムサリを有する被調査家庭が「夫婦」中心の理想的な家族を象徴すると位置付けられたことである。前述した如く、サルリムサリ民俗誌では「ライフヒストリー」を重視するようになったが、これは必ずしも「個人」としての多様性—に焦点を当てることを意味しない。被調査家庭の主人公は「夫婦」であるが、既に独立した子供や孫との「家族」の関係が、夫婦の暮らしの前提として述べられ、実際、2～3 世代家族の仲睦まじい写真が多くの民俗誌にほぼ慣例的に掲載されている【盤谷里生活財調査報告書、26 頁、①、19 頁、②、28 頁、③、21 頁、⑦、29 頁、(⑩)、21 頁、(⑬)、15 頁、⑭、41 頁、⑮、22-23 頁、(⑯)、21 頁など】。このような調査者側のまなざしは、在韓

華僑や外国人女性と結婚した夫婦という、従来の民俗調査では取り上げられなかった調査対象の選択や書き方にも同様に表れた²⁷。つまり、「幸せなスタンダードの家庭」「責任感ある家長」「賢い‘家族のコーディネーター’（としての妻・母）」「頼もしい長男」「愛らしい末っ子」【(16)、20頁】という家族の理想像の提示である。

4. 「国立民俗博物館民俗誌」という呪縛、学際性の生み出す可能性

以上で検討した韓国民博によるサルリムサリ民俗調査・民俗誌の特徴は、あくまでもモノ中心的・現在のスタンスに立っていた日本の生活財調査が、認識論・方法論の上で、従来の韓国民俗学の民俗調査とあまり変わらないものに土着化 (localization)²⁸ したことを示している。ライフヒストリーの「語り」を通してモノから「精神的要素」【①、20頁】を読み取ろうとしたり、補助資料化したモノに客観性を求めたり、「タイムカプセル」【③、14頁】化のためにモノを記録したり、個別家庭のモノを「地域」「国家」の文化・歴史に対する代表性・典型性の物差しから価値付けしたりするやり方やまなざしがそれを物語っている。しかし、このような傾向が、国立民俗博物館というナショナルな博物館としてのポジションとも密接に関わっていることを見落としてはならないだろう²⁹。つまり、国家予算を使って公務員が実施する以上、普通の人々＝国民に納得できる調査対象の選択基準を明確に示す必要があり、それが、主に民俗学者らが構築してきた「地域性」という見せかけの「客観性」や、地域(性)を最もよく表す民俗という「代表性」「典型性」の論理だったのである。また、そのような基準から選び取られた韓国³⁰の生活文化を「展示」するというナショナルな博物館としての立ち位置が、多くの国内地域の中の「代表」「典型」という「客観」的な展示「資料」への強いこだわりを生み出したともいえる。

とはいえ、上述した全体的な特徴の一方で、現在の生活文化＝民俗のリアルに着眼する調査・記述も少なからず見出される。サルリムサリ民俗誌よりも「地域民俗誌」のほうで多く見られるが、特に注目されるのが3である(表1)。全部で8章構成の3は、調査者が滞在した2～10月の間に村落で起きたこと、つまり、調査者に観察できたことをそのまま記録した結果として記述されている【3、9頁】。例えば、第2章「自然環境の変化と深浦村落の暮らし」が取り上げたのは、住民の異質性である。地域の純血性を求める従来の民俗調査や民俗誌記述においては簡単に切り取られたり、矮小化されたりした異質な存在、例えば、日本統治時代・独立後・最近に亘って他所から移住してきた人、村落内の空き家に住む生活保護受給者、都市移住に失敗して帰郷した人など、非ネーティブ住民や元ネーティブ住民の移動と定着を、ネーティブ住民の動きと合わせて色々な角度から述べている【3、35-69頁】。また、第5章「1年ごとに繰り返される行事」では、「ソルナル」(旧暦1月1日)、「正月デボルム」(旧暦1月15日)、「堂山祭」(旧暦2月1日)のように、伝統的な民俗調査の対象だった年中行事の他にも、小学校の入学式や、深浦村落内で最も信者数の多いキリスト教の復活祭など、国家制度・外来宗教関連の行事も積極的に取り上げた【3、167-233頁】。つまり、予め「民俗」と規定した項目に従って行われる民俗調査や民俗誌記述とは一線を画し、徹底して「現在」の「暮らし」を見つめる厚い記述 (thick description) を試みたと評価できる [ギアーツ 1987: 3-47]。

このようなリアルへの関心は、これまでの民俗調査が注目しなかった子供や若者の日常へと広

がり、民俗学が「民俗」と規定してきたものに疑問を呈する。例えば、次の記述は興味深い。

子供たちは山村で暮らしているが、親世代の生業や価値観に影響されず、割と自由に生活している。例えば、トウガラシ栽培に対しても、親の仕事ということ以外、特に関心を示さない。また、村落の山祭などの共同体儀礼や、祖父母世代の信仰儀礼、歳時風俗にも特に興味を示さず、「オマリニナル子供の日」や「オボイナル親の日」など、自分たちが慣れていることをもっと重視する傾向がある。（中略）既存世代（親・祖父母世代）も自分たちがやってきたこと（山祭や歳時風俗など）がこの子供たちに受け継がれないことに気付いている【4、72頁、74頁】³⁰。

生活者が「慣れていること」こそが「暮らし」であり、民俗学は暮らしの実態の究明と理解のために議論を深めるべきだろうが、従来の韓国民俗学は「基層文化」[民俗学会 1999（1994）：31、崔他 1999（1998）：37、崔他 2001：16-18]の「発掘」[金他 1996：11]を目的に据え、普通の人々に馴染みのない物事を中心にアカデミズム化を図ってきたことに鑑みると、以上に引用した調査・執筆者の視線は極めて示唆的である。あまり料理しない共働きの母や料理上手な父、外食やコンビニのおにぎりで夕食を済ませることの多い高校生の食生活【(5)、212-216頁】や、町内でよく見かける犬の糞の放置やごみの不法投棄などに対する警告として工夫された禁止文【(5)、242頁】、一人暮らしの老人が孫以上に大切にすべしペット【(5)、252頁】などは、いまここでよく見かけるリアルであり、「些細だと思われる日常」【(5)、262頁】だが、このような「現実」こそが「民俗」【(5)、261頁】だとする認識が、韓国民博の民俗誌に新たな視点と対象をもたらしたことは明らかである。

なぜこのような民俗誌が可能だったのか。これに答えるためには、以上で挙げた地域民俗誌の調査・執筆者たちの学問的屬性を考慮する必要がある。3の調査・執筆者は近代史、4は韓国の女性史と文化地理学、(5)は人類学（ロシア）と民俗学を専門としており、まさに学際的である³¹。実は、このような学際性が韓国民博の研究スタッフの大きな特徴でもある。管見の限りでは、この学際性こそが、「しばしば神話、伝説、物語、ことわざ、謎々など、言い伝えられる話 (folklore)」(括弧は原文のまま)や「民衆或いは庶民の伝統的な風習」と定義される「(実)生活からかけ離れた破片」でしかない「民俗」だけでは「人々の現在的な暮らしや意識形態をまともに理解」[金 1996：12]できない、という他学問からの厳しい批判に立ち向かえる可能性の裏付けとなっている。

5. 「現在」「変化」「個人」を捉える

韓国民博のサルリムサリ調査に大きく影響した日本の生活財調査は、韓国の民俗学研究者によっても試みられた[周 2001a、2001 b、苐 2011]。2002年に日本民博で開催された国際シンポジウム「現代韓国社会における生活文化の研究とその方法—『2002年ソウルスタイル—李さん一家の素顔の暮らし』展を通して」に発表者として参加した周は、それまで「住生活や消費財の研究を決して彼ら（日本の生活財研究者ら）のようには行わなかった韓国人研究者たちに大きなショック」と「感動」を与えたと、日本の生活財調査の手法を初めて知った時の感想を述べて

いる [周 2008 : 145]。また、同様の方法を京畿道の食生活調査に用いたことについて、「冷蔵庫内の食べ物だけを調べるにも相当の時間と努力が必要だった」が、それに比べて得られる「結果」、つまり、有効な「文化的解釈」は限定的だったため、この調査を最後に同じ方法は用いていないとする [周 2008 : 145]。

サルリムサリ調査の難しさは、周と同様に、京畿道内のアパート団地（「坪村」^{ビョンチョン}）で住空間の使い分けや各空間内に置かれた「住生活用品」[金 2003 : 2] を調べた金の研究からも察せられる。ただ、韓国民博や周とは違い、日本の生活財調査の影響は見られないこの文化人類学の研究は、住居学・家政学³²・社会学などの議論を踏まえつつ、西欧近代化した高層集合住宅である韓国のアパートを対象に「韓国的住居観念がいかに持続・変化」しているか、さらにアパートの住民たちはいかなる「住居文化」[金 2003 : 2] を作っているのかに焦点を当てた。金は、この研究のためにアパート団地で調査可能な世帯を探すが、「怪しい人」と誤解され、うまくいかず、相当苦勞している。その中で 35 世帯が調査に応じ、社会経済的属性に関する質問紙調査は実施できるが、写真撮影に関しては大半が否定的だったため、全室撮影を許可した 3 世帯以外については辛うじてリビングとキッチンのみ撮影できた [金 2003 : 9-11]。この研究を通して金は、ファミリー及び主婦のアイデンティティを表象するリビングという空間の象徴性や、子供部屋の拡大・重視などを明らかにするが、この研究が以後続かなかつたのは、周が指摘した同調査の大変さにも起因しているだろう。

1 人で行う調査研究にかなりの辛抱強さを求めるサルリムサリ調査は、今のところ韓国民博による取り組み以外見当たらない³³。しかし、この手法や考え方が、これまで基層文化の解明に勤しんだ過去志向の民俗学者の視線を「現在」に向けさせ、さらに「生活」の一部として「当たり前」のように置いてあると思われるモノに注意を喚起したことに間違いはなく、その意義は大きい。では、韓国民俗学はこのような問題関心といかにつきあっているのか。

韓国民俗学では 1970 年代に金泰坤^{キム テゴン}を中心に「現在学」をめぐる議論が積極的に行われた³⁴。要するに、韓国民俗学が「民俗を〈残存文化〉や〈民間伝承体〉に規定してきた従来の見方」は、「民俗を過去の文化」の「停滞現象」と捉えた「錯誤」であり、村落だけではなく「都市や現代文明の中で暮らす」「大多数」の人々の「生活の総体」を捉えなければならないという主張の浮上である [金 1984 : 57]。ただ、「韓国民俗学の基本目的は韓民族の研究」[金 1984 : 22] であり、「民族構成員の多数普遍的かつ核をなす基層的構成員」たる「民間人」[金 1984 : 22] の文化を「民族の基層文化」[金 1984 : 23] と位置付け、「民族の誇り」[金 1984 : 163] につながる民俗学という認識は持続したため、韓国民俗学の支配的な考え方に対する根幹的な変化が図られたとはいえない³⁵。しかし、「社会民俗学」[金 1984 : 72] の発想を内包しつつ、「民俗を『現在学』の対象」[李 2013 : 106] として捉え直した当時の議論はいまでも示唆に富む。恐らくその後の韓国民俗学者たちに求められたのは、この議論を丁寧に吟味し、韓国民俗学を支える主要な認識・方法論に発展させることだったろうが、実際は、周辺の主張と見なされ、継続的な議論深化のテーマにはならなかった [姜 2003 : 49、李 2013 : 131]³⁶。

韓国民俗学における「現在」の問題は、「都市民俗学」のコンテクストからも論じられた。「村落」「都市」という線引き自体が「現在」をまともに捉えられなくすると思えないが [岩本 1978 : 43・52]、村落民俗の変貌—衰退・消滅—を受けて考案されたサバイバル策のような都市民俗学論は、「都市民俗という研究領域」を究明するために「都市という空間を設定」すべきと

いう論理 [朴 2011: 157]、つまり、村落民俗学とは別分野として取り上げるべきと主張される傾向が強い³⁷。いま普通に経験されるようになった物事を捉える上で、「現在学」よりも「都市民俗学」の議論のほうが持続的に行われてきたのは、「伝統的民俗現象」[姜 2003: 35]の研究こそが、韓国「民俗学」の本領を発揮できる唯一の分野という意識が働いているためであり、後から発生したと思われる「変化」=リアリティは、「都市」という囲いの中に封じ込めることによって、民俗学というアカデミズムのレゾンデトールを確保しようとする企てと無縁ではないだろう。

都市民俗学的傾向も見られるものの [周 2006]、韓国人の食生活を中心に現在の生活文化を民俗学の主要な課題として論じてきたのが、既に触れた周である [周 2001a、2001b、2007]。周によれば、韓国民俗学における衣食住の研究は、残存物に対する物質研究として理系研究者との協働で展開し、モノの通史的発展を追うことで民俗学的研究に含まれた [周 2007: 218、219]。しかし、そのようにして明らかになった衣食住は「専門家の知識」「過去の民俗知識」として「教育」「観光」[周 2007: 223]の現場で消費されているのが現状なのである。日本の生活財調査の手法を使って明らかにした韓国人の食生活の現在は、キムチ専用冷蔵庫があるのでキムジャン³⁸をしなくなったり、キムチなどの長期貯蔵食を食べなくなったのでキムチ専用冷蔵庫は要らなかったり、60歳を超えた夫婦と同居する娘との間に食事をめぐる葛藤があったり、料理の作り方が母と娘、姑と嫁のような人同士に限らず、マスメディアから獲得されることがよくあつたりする [周 2001a: 254-259、2001b: 314-315]。このように変数の多い現在の食生活に対する研究から周が主張する衣食住の民俗学的研究は、「年齢・職業・地域によるバリエーション」³⁹や「近代の変容」を丹念に調べることで、いまを生きる韓国人の「リアルな暮らし」を問題にしなければならないものなのである [周 2007: 224-225]。

衣食住を含む生活文化の現在的あり方を問う研究は、2000年代以降、「個人」の暮らしに着目し始めた文化人類学において大きく進展した。その足場となったのが、同様に2002年からスタートした「家と家族の文化と歴史」(~05)と、「民衆生活史の記録と解釈に基づく韓国近現代史の再構成」(~05)・「身近な昔—民衆生活史の記録と解釈」(05~08) (以下「民衆生活史」)と名付けられた二つの共同研究(現「韓国研究財団」助成)である。主に文化人類学・住居学などの研究者で構成された「家と家族の文化と歴史」研究と、文化人類学・民俗学・歴史学などの研究者で構成された「民衆生活史」研究は両方とも、普通の人々によって営まれる身近なものであり、かつ繰り返され、陳腐にさえ思われる「日常生活」を解き明かすべき学問の対象に措定し [文 online、咸 2008: 11]、「普通の人々」=暮らしの当事者としての「個人」の暮らし方・生き方にフォーカスを合わせて考察し、その人々に関する記録—ライフヒストリーや関連写真などをデジタル・アーカイブ化⁴⁰している⁴¹。

これらの共同研究による成果の中で特に興味深いのは、韓国のアパート内に設置される西欧型キッチンの韓国的受容を取り上げた研究である [咸 2002、尹 2004]。韓国の住宅建築技術の発展、住宅及びキッチンの近代化・欧米化をめぐる社会的言説などを検討しつつ、1945年から現在までを三つのタイム・スパンに区分し、年齢・出身地・学歴・家族構成などによって多様に構成された被調査家庭の住まいとその中のキッチン調べた尹 [2004]によれば、一見効率的に女性の家事労働を軽減してくれそうな西欧型オープン・キッチンは、韓国の主婦たちに、常にキッチンをきれいにしておかなければならないというプレッシャーを与えている。1970年代以降の家電製品の多様化と普及、80年代半ば以降の販売お惣菜の充実などにも拘らず、依然として韓国

の主婦の仕事が軽くなっていないのは、尹によれば、キッチン＝「台所」の仕事は女性の仕事という意識がまだ根強いからである。つまり、普通の韓国人たちが当たり前のように使っているモノとそのモノによって作り上げられる環境は、当事者としての個人を取り囲む社会の集会的価値観や文化的拘束性とせめぎあいつつ、いまの暮らしを作っているのである。

まとめにかえて

2015年5月、地域民俗の年事業10周年を迎えた韓国民博は、中堅民俗学者たちを集めて「地域と共に過ごした国立民俗博物館10年、成果と反省」という討論会を開いた。色々な批評のうち特に目を引くのは、従来の韓国の民俗誌に比べて「現在」に重きを置いた調査・記述を肯定的変化と評価しつつも、韓国民俗学の「アイデンティティは民の文化の中でも特に過去から伝わる伝統文化を明らかにすること」[韓2015:152]にある、という指摘である。また、とりわけ都市民俗誌の場合、「過度に現在的」[李2015:199]とも批判された。

地域民俗の年事業や都市民俗調査の一環として作られた韓国民博の「サルリムサリ民俗誌」と「地域民俗誌」は、補助資料化したサルリムサリ資料に対する客観性の追求や、被調査家庭の選別に見られる代表性・典型性の重視といった再考すべき問題を孕みつつも、いまここでよく見かけるリアルをすくい上げようとした、従来の韓国の民俗誌とは一線を画したものである。また、このような変化の背景に韓国民博の国際交流の増加や、異文化への関心の拡大、民俗調査者・民俗誌生産者らの学際性があることは、前述した通りである⁴²。しかし、この認識論・方法論上の広がりゆえに、文化人類学のエスノグラフィとなかなか区別がつかず、「過去から伝わる伝統文化」の記述の少ない、「過度に現在的」なこれらの民俗誌を、果して「民俗」誌と称しうるかどうか、疑問視されたのである。

韓国では依然として、「(韓)民族文化」の研究が韓国民俗学の中心課題の一つとされ[姜2003:44-48]、「韓国民俗文化の持続性」[姜2003:51]の研究を重んじる立場が有力であり、「民族文化学」[南2009:23]といったレッテルを貼ってこれまでの韓国民俗学の成果を批判・否定する議論は容易に受け入れられていない。筆者も「民族主義」「本質主義」批判一辺倒の議論には賛同できないが、いまなお、近代以前とか伝統といった物差しで民俗を規定することは、韓国民俗学をさらに「考古学化」するだけではないか。しかし、近年の研究動向、例えば、「チャジャンミョン」[金2006]、「クリスマス」[廉2013]、「ノレバン」[金2013]が、現在の韓国人の食生活・年中行事・遊びにおいていかに当たり前のモノ・コトになってきたかを論じる研究が徐々に増えていることから考えると、「現在ここにある当たり前」[岩本1998:29-30]を捉える問題意識と、韓国民俗学はかなり近くにある。

最後に、韓国の民俗学者たちから誤解のないように付け加えておきたい。本誌は『日常と文化』という名を冠しているが、この「日常」は、「衣食住」に限られるものでもなければ、意識的に構成される「政治性」[丁2015:87]に無頓着なものでもない。問題提起したいのは、「人」を民俗学の研究対象に定めながら[姜2003:62]、暮らしの当事者に最も身近な「当たり前」を見落としてはならないということである。制度政策・科学技術・マスメディア・商業主義など、ローカル／ナショナル／グローバルなレベルで進むあらゆる変動に伴って徐々に更新される人間生活

のリアリティを身近なところから問いかけてほしいのである。

注

- 1 岩本は「『地域民俗文化の年』事業で、毎年3箇所のサルリムサリ調査が実施され」〔岩本2015:6〕ると述べたが、同事業は原則として農村と漁村を対象にしているため、正確には2か所である。ただ、途中から都市民俗調査が始まり、1か所が加わった。詳細は後述する。
- 2 年間来館者数は『民俗年報2014』〔国立民俗博物館2015:32〕、経費は民俗研究課・鄭然鶴学芸研究官による〔2015/10/27インタビュー〕。
- 3 以下、韓国民博刊行の『民俗年報』を引用する際は〔年報〕と記す(詳細は参考文献の定期刊行物を参照のこと)。
- 4 「在外同胞生活文化調査」は、2004年にメキシコ(ソウル大学校社会科学研究院比較文化研究所)、2005年には日本の関東地域(韓国文化人類学会)へと引き継がれた。しかし、ロシア連邦(2003~06)での「韓民族生活史調査」や、「中国少数民族婚礼文化調査」(2007~09)などの国外調査には、韓国民博の研究者が主導的に参加し、館外の専門家と共同実施された。これは、韓国民博に海外留学経験者などを含めた調査研究スタッフが増員され、彼らの来歴も多様化したことと関わりがある。
- 5 本稿は、韓国民博の現在地への移転(1993)後に焦点を当てている。しかし、その前にも民俗調査は行われていた。例えば、民具・農具・漁労道具などに対する「民俗資料現況調査」(1982~85)、「民間信仰及び冠礼、婚礼調査」(82~86)や「蝸島の民俗調査」(82~86)などがある〔国立民俗博物館編1996:167-195〕。特に、「蝸島の民俗調査」は、『民俗博物館叢書Ⅰ 蝸島の民俗一堂祭(鎮里及び食島)、家神信仰、歳時風俗、通過儀礼篇一』(1987)、『国立民俗博物館叢書Ⅱ 蝸島の民俗一大里願堂祭篇一』(1984)、『国立民俗博物館叢書Ⅲ 蝸島の民俗一喪・祭礼、葬制、民間医療、民謡、説話篇一』(1985)の一連の調査報告書にまとめられた。1993年以前の韓国民博には「館長と課長を含めて学芸研究職が7・8人しかなく、学術調査を進めるのに人とお金があまにも足りなかった」ので、「(移転)開館準備資料の収集のような調査だけ」〔年報2003:137〕を実施した。
- 6 「普信閣」は、ソウル市宗路区にある鐘楼であり、毎年大晦日の深夜0時に鐘をつく除夜の鐘の行事が行われる。
- 7 但し、西暦正月の調査には館外の民俗学者なども参加した〔年報2005:70〕。
- 8 現代韓国の宗教人口(2005年現在)は、仏教約43%、キリスト教系約56%(プロテスタント約35%・カトリック約21%)あり〔文化体育観光部2012:9〕(%算出は筆者)、西欧発外来宗教のキリスト教は多くの韓国人たちの考え方や生活に影響している。しかし、巫俗や仏教とは違い、韓国民俗学の中で取り上げられることは皆無に近かった。しかし、『韓国歳時風俗事典』の中で「現在の聖誕節は、宗教に拘らず、ほとんどの韓国人にとって1年を締めくくる歳時と考えられている」〔姜2006:349〕と位置付けたことは「現在」を民俗学的視野に取り込んだ試みとして評価できる。
- 9 韓国民博が「本格的・持続的に異文化を調査研究」し、関連資料を集められるようになったのは、「2000年に海外交流展示の予算が確保」〔千2002:7〕されてからである。
- 10 韓国民博の現館長(2011~現在)である。
- 11 ICOM日本委員会は「International Committee for Museums and Collections of Ethnography」を「民族学の博物館・コレクション国際委員会」と訳しているのに対し、韓国民博は「世界生活文化博物館委員会」と訳し

- ている。
- 12 2009年にも「世界生活文化博物館委員会2009ソウル総会」(ICOM-ICME 2009 Seoul Conference)を主催した。なお、会議の韓国語名称は2004年と同じではない。
- 13 千は、ダン・モンローが韓国民博の展示に対して「近代と現代の韓国文化を取り上げるべきだと提案」したことに触れながら、「近現代を排除」した「伝統文化」という発想は「極めて危険」と強調した[千2007: 299-300]。
- 14 本稿は「民俗誌」を、「ある文化や社会に対する記録と分析」とともに、「主に参与観察に基づいて行われる人、場所、または団体に関する記述」[Coleman and Simpson n.d. online]と規定したい。「民族誌」と訳さないのは、民俗学・(文化)人類学の区別によるものではない。「民族」を対象にするという誤解からより自由になれるだけでなく、究極的には「人」を理解するために「文化」を「記述」という意図を「民俗誌」のほうがよりよく表すという全の主張に同意するからである[全1990: 137-138]。このように「民俗誌」を規定すると、韓国民博のサルリムサリ調査報告書は、その記述内容から「サルリムサリ民俗誌」と称することができる。
- 15 韓国民博が民俗文化の年事業を推進したのは、「^{●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●}国(韓国)を代表する生活史博物館としての役割及び機能の強化」[年報2008: 32]という、2007年に打ち出された当館の「ヴィジョン」、つまり、自らの位置どから理解すべきだろう。韓国民博発行の『年報』を1994年創刊号から調べてみると、「生活史」を調査・研究の対象にするという表現は散見されるものの、以上のような「韓国を代表する生活史博物館」という明確な公表(announcement)は、「年200万人の来館者とその半分以上を上回る100万人以上の外国人来館者」を意識した第14号[年報2006: 2]からである。また、韓国民博は「地域と共に成長する」というスローガンを掲げ、「民俗生活史博物館協力網」の構築を2005年から進めている[年報2008: 29]。地域民俗の年事業が、韓国を代表する生活史博物館としての韓国民博の「役割」「機能」の「強化」を目論んで行われたことは想像に難くない。
- 16 2014年には^{キョンギド}京畿道で民俗調査が実施され、民俗誌は現在刊行中である。ということで、本稿の検討対象には含めない。
- 17 表1を見ると、2008年に4冊の『都市民俗調査報告書』が刊行されており、09年にはない。それは、表1が「刊行年度」を基準にしているためであり、実際は2007年に調査し、2008年の調査報告書として出たのが(5)と(4)、2008年に調査し、同年12月に刊行したが(6)と(5)である。つまり、(6)と(5)は2009年に出る予定だった。なお、以下では、表1の資料を引用する際、【通し番号、頁数】のみを記していく。ただし、「盤谷里生活財調査報告書」には通し番号を付しない。
- 18 「サルリムサリ」中心の民俗誌は、韓国民博だけでなく、『韓国民俗総合調査報告書』『郷村民俗誌』などを刊行した韓国の「文化財管理局」(現「文化財庁」)や「韓国精神文化研究院」(現「韓国学中央研究院」)などでも試みられたことはない。韓国の民俗誌については、李が詳しい[李2003: 248-251]。
- 19 「韓国土地公社」が韓国民博に発注した「行政中心複合都市建設予定地域人類・民俗分野文化遺産地表調査」は2005.9.8～06.11.8、総事業費約15億6千万ウォンをかけて行われた[年報2006: 87]。その調査結果は、地域民俗誌、生活財民俗誌(表1)の他、映像民俗誌と民家調査報告書の計4冊刊行されている。
- 20 韓国における類似した調査研究を調べ、触れてはいるが、当該調査には直接影響していない。「生活財」調査という基本的な認識や具体的な方法は、金がほぼ1頁に亘ってそのまま引用している『生活財生態学Ⅲ』[商品科学研究所+CDI 1993: 3-4]に多くを負っている。
- 21 「生活財」という用語は日本語であり、これまで日本民俗学になんらかず影響されてきた韓国民俗学の来し方を表すかのようだという疑問・批判である【(5)、10頁】。そこで、普通の韓国人により馴染みのある「サルリ

- ムサリ」^{所帯道具}「セガン」「家財道具」などに言い換える試みがなされ【③、13頁】、2008年には「生活財」「サルリムサリ」が併用されるものの、以後、表紙などに記す公式名称は「サルリムサリ」に定着した。但し、著者によっては本文中で併用したり【⑦、16頁】、「セガンサリ」【⑰】と書いたりすることもあった。
- 22 農漁村の家庭以外は基本的に調査票の郵送によって行われた商品科学研究所+CDIの調査〔1993〕や、約40日間9人の調査者によって行われた佐藤の調査〔2002〕や、29日間6人の調査者による盤谷里調査〔金2006：22〕に比べ、この一連の調査はより長い間、より少ない人数で生活密着型調査として実施された。2006年の調査【1、①、2】だけは現地の研究者らが中心になり、韓国民博のスタッフは3人のみだったが、翌年からは韓国民博の学芸士1～2名と、特任研究者1～2名、さらに、研究補助・撮影スタッフ1～3名で構成される調査チームが2～3か月間現地に滞在しながら行うようになった。ただこの調査は、地域民俗調査と連動して行われる。韓国民博の学芸士・特任研究者（+撮影）の2～3人からなる地域民俗調査チームが先に現地入りし、8～10か月間滞在調査を実施するが、その途中からサルリムサリ調査が開始される。地域民俗調査チームの全員、或いは、その一部が新しく加わる特任研究者・撮影者と連携しながら調査するのが常である。サルリムサリ調査は、家の中のモノの一つ残らず見せてくれる一ことが期待される一被調査家庭の選定から依頼、受諾までの一連の準備作業を含め、1点1点取り出してデジタル調査票に打ち込みつつ、撮影するという気が遠くなるような悉皆調査である。
- 23 「購入時期」は、「入手時期」記録のためである。調査票＝「サルリムサリ目録」の項目は、盤谷里生活財調査報告書（「生活財現況」表）から〈⑳〉まで調査者によって何度も修正変更された。最近の〈㉓〉の項目は「通し番号／名称／数量／使用者／入手時期／入手者／入手形態（購入・贈与・制作・貸与・その他）／入手先（購入先・贈与先）／値段／ブランド／保管／特徴」であるが、実は、項目だけでなく、「数量」の数え方も定まっていない。もともと単に「数量」として始まったものが、途中から「主数量」「副数量」に分けられる。そのため、同じ「器」でも単体で数えたり、種類別（同保管場所）に数えたりといった混乱があり、各家庭のサルリムサリの総数さえ簡単には比べられない。
- 24 さらに、「60歳以上」「記憶力がいい」「よく記録する」といったことも考慮された。
- 25 地域民俗の年事業における韓国民博の民俗調査は、「道」の中の「農村」「漁村」をそれぞれ1か所ずつ選んで行われた。従って、都市民俗調査など一部を除いて、サルリムサリ調査における対象家庭の生業は「農業」「漁業」がほとんどである。
- 26 沈はこの問題に自覚的だった【8、⑦】。韓国民博のサルリムサリ調査は、今和次郎の考現学に影響されており、「現在、つまり‘いまここ’を生き、活動する人々の行動や思考、そして彼らの用いる様々なモノを記録・研究」する極めて現学的な試みだが、民俗誌の対象として、どこ・誰を取り上げるべきかは非常に難しい問題だと指摘する。そして、始まったばかりのこの試みは「（その重要性を）誰もが知っていながら、進もうとしない道」であるため、ある程度成果が蓄積し、議論を続けていく中でその解決も可能になると述べている【⑦、12-13頁】。
- 27 都市民俗調査によって2012年からは、「多文化」を対象にした民俗誌が刊行されている。2012年には「華僑の夫」と「韓国人の妻」【⑱】、2013年には「韓国人の夫」と「フィリピン人の妻」【<⑲>】を基本とする家族が取り上げられた。但し、<⑲>の調査対象家庭の選定は従来とは違う。「多文化家庭」に調査対象を定め、5か月間20回も交渉が続けたが、全て失敗だったと調査者らは回顧する。<⑲>の家庭に決まったのは、多文化家庭の子供という理由で学校生活になじめず、内気な性格に変わってしまった子供に「家族や自分に対するプライド」を持たせたいという夫婦の強い思いが反映されたからである。嫁姑問題や離婚なども経験した<⑲>の家庭を対象にしたことは注目に値する。なお、韓国では国際結婚家庭のことを「多文化家庭」という。

- 28 これは、日本の生活財調査が、「韓国民俗学の思想的伝統や方法論的慣わしの中で土着化」したという意味である。
- 29 韓国民博によるこの一連の民俗調査を「国家による‘サービス’」であり、「韓国民俗学の研究及び発展のための資料提供」に意義があると述べる調査・執筆者もいる【(5)、260頁】。
- 30 他にも「多様な文化を個人が選べる」[李2008：267]ようになり、韓民族の伝統文化＝民俗と捉えられてきた祖先祭祀が、いまのお年寄りたちから「働くだけで精いっぱいなのに、(子供に)こんなことさせたくない」「世の中は変わった」などと語られる現状も2008年の都市民俗調査者によって報告されている[李2008：268]。
- 31 これに対し批判的な意見もある。つまり、「村落民俗誌」の調査・執筆を担当する人は、基本的に村落民俗に関する先行知識や調査経験が多ければ多いほど有利なので、「民俗誌作業と直接関係しない分野」の人よりも、「専門研究者」を積極的に使ったほうが良いという主張である[韓2015：152]。
- 32 1960～70年代には大学の学科名として「家庭学」科が散見されるが、いまはほとんどが「家政学」と表記しているようである。1947年に発足した「大韓家政学会」(The Korean Home Economics Association)は、2006年に「日常生活・日常性・生活科学」をテーマに学術大会を開催している。
- 33 都市開発によって村落の一戸建てから都市のアパートに移住する家族が、いかにモノを分類・処理するかを調べつつ、生活空間の再編の問題を検討した方も生活財＝サルリムサリ調査方法を用いた[苴2011]。移住によって発生するモノの廃棄・存続は、経済的価値や物理的機能よりも、家族関係の持続に役立つか否かに対する所有者個人の判断に基づいて行われるという興味深い指摘がなされている[苴2011：64]。
- 34 圓光^{ウォンガン} 光 大学校民俗学研究所は、1971年10月23・24日に国際民俗学学術会議「伝統と民俗学の現代的方向」、1972年2月9日に第1回民俗学討論会「民俗学の転換的課題」、同年6月4日には第2回民俗学討論会「民俗学の対象」などを開催している[金1984：43-44]。
- 35 金泰坤の現在学における啓蒙主義的思想については任[2013]が詳しい。
- 36 金泰坤の現在学をめぐるのは南[2003]と林[2005]との間で議論が行われたが、紙幅の都合上、本稿では触れない。
- 37 主流の都市民俗学の議論に従って、例えば、バレンタインデーなどを「都市」の「歳時風俗」と捉えてしまうと、「田舎」という、都市とは異なる社会にはそのような民俗は存在しないことになる。また、この見方は同時に、村落には独特の古い民俗があることを暗黙裡に前提してしまうのである。しかし、都市民俗学の議論を主導した林は、近年、フェイスブック[林2012]などを現在の視点から取り上げている。議論の組み立て方は別としても、韓国人の生活の中で身近なものになったインターネットなどのオンライン上の人々のつながりやその文化＝民俗を「現実文化」[林2012：183]として対象化する試みとして注目に値する。
- 38 「キムジャン」は、冬を通して食べられる大量のキムチをつけるため、秋から冬にかけて行うキムチづくりである。2013年には「Kimjang, making and sharing kimchi」という名称でユネスコの無形文化遺産に登録された。
- 39 「地域」という枠組みについて周は、村落社会ならば「地域性」というものが捉えられるかも知れないが、都市化した所で「地域性」は無意味だと指摘する[周2001a:259]。特に、現在の食文化における「地域性」は商業主義によってのみ保証されているに過ぎない[周2001b:343]。
- 40 普通の人々を記録の対象とする考え方は、韓国のアーカイブ学にも波及している[郭2011、沈2011、任2011]。従来「国家施策に従う」傾向が強かった韓国のアーカイブ学は「普通の人々の暮らしの記録」をほとんど扱っていない[郭2011：6・28]。しかし、「資本主義的日常性の中に隠された抑圧的構造を明らかにす

る」ためにも「多様な形態の日常アーカイブ」[郭2011:9-10]を構築すべきだという議論が、近年積極的に行われている。

- 41 ただ、「家と家族の文化と歴史」研究は、住居や家族関係の現在のあり方や近代以降の変化プロセスの究明に主眼を置いたのに対し、「民衆生活史」研究は、急激に変貌した20世紀を生き抜いた「歴史無き」「民衆」の「身近な暮らし」をとにかく書き留めておくことを中心課題に据えた[朴2005:11-13]。なお、「民衆」とは「身近な隣人」に相当する概念であり、階級的なものではない[咸2008:16]。
- 42 韓国民博は、ネパール(2011)とベトナム(2011・2012)の婚礼文化や中国とベトナムの葬送儀礼(2012)のように、異民族の文化を対象にした「海外民俗調査」を行ってきた[年報2012、年報2013]。しかし、2013年からその着眼するところが「物質文化」へ変わり[年報2014、姜2014:120]、同年には「ジーンズ」をテーマに、イギリス・ロンドン(London)、ドイツ・ブッテンハイム(Buttenheim)、アメリカ・サンフランシスコ(San Francisco)とロサンゼルス(Los Angeles)、インド・ムンバイ(Mumbai)とカヌール(Kannur)、日本・倉敷市で現地調査を実施し、それに基づいた企画展示「^{ジーンズ}チョンバジ」展(2014.10~2015.3)を開いた。この展示の初日(10.15)には物質文化、特にジーンズの文化人類学的調査研究を主導してきたイギリス・UCL(University College London)のダニエル・ミラー(Daniel Miller)などによる国際シンポジウムを開催している。あまりにも「明らか」(evident)で、「至る所にあ」(ubiquitous)り、「当たり前」(taken for granted)なため、「見えない」=「見ようとしぬい」(blind)[Miller and Woodward 2007:337]のものであるジーンズを通して、「最も個人的」なもの「最もグローバル」なものとの間を揺れ動く現代文化[Miller and Woodward 2007:336]に注目するミラーの調査研究[Miller and Woodward 2007、밀러2014]に対する韓国民博の強い関心は、「ノスタルジーにとどまらない「現在の民俗」[年報2012:4]、「『いまここ』を語る民俗」[年報2013:5]を通して、「現在」「いまここ」の韓国人の^{当たり前}を捉えようとするスタンスの変化を示している。なお、2014年の「世界物質文化調査」のテーマは「塩」である。

参考文献

日本語

- 李京燁／金良淑訳 2003「韓国民俗学界の研究動向と課題」『韓国朝鮮の文化と社会』2。
- 岩本通弥 1978「都市民俗学の予備的考察—東京大田区での民俗調査を経験して—」『民俗学評論』16。
- _____ 1998「『民俗』を対象とするから民俗学なのか—なぜ民俗学は『近代』を扱えなくなってしまったのか—」『日本民俗学』215。
- _____ 2015「“当たり前”と“生活疑問”と“日常”」日常と文化研究会『日常と文化』1[이와모토토미치야 2015「당연, ‘생활의문’, ‘일상’」同書『일상과 문화』]。
- ギアーツ, C.／吉田禎吾・柳川啓一・中牧弘允・板橋作美訳 1987『文化の解釈学Ⅰ』東京:岩波書店。
- 佐藤浩司 2002「生活財調査—ものはなにをかたる—」朝倉敏夫・佐藤浩司編著『2002年ソウルスタイル—李さん一家の素顔のくらし—』吹田:千里文化財団。
- 商品科学研究所+ CDI 1993『生活財生態学Ⅲ 「豊かな生活」へのリストラ—大都市・地方都市・農村・漁村—』東京:商品科学研究所。
- 丁秀珍／金賢貞訳 2015「韓国におけるサルリムサリ研究の展開」日常と文化研究会『日常と文化』1[정수진 2015「한국 살림살이 연구의 전개」同書『일상과 문화』]。
- 南根祐 2009「韓国民俗学の現在—『民俗』の文化財化と観光資源化を中心に—」『日本民俗学』259。

韓国語

※可読性を考慮し、「著者」「編集者・団体名」の漢字表記が分かる場合、漢字表記にした。

- 姜昞杓 2014 「국립민속박물관 물질문화 현지조사」 국립민속박물관 국제학술대회논문집 『물질문화 연구와 박물관』
[「国立民俗博物館における物質文化の現地調査」国立民俗博物館国際学術大会論文集『物質文化研究と博物館』].
- 강석훈 2011 「재개발 이주민의 생활제 분류와 집 존속관—화성시 동탄면 방교 3리 타향살이 경험자의 C가(家)를 사례로—」 중앙대학교 대학원 민속학과 물질문화전공 석사논문 [カン・ソクン「再開発に伴う移住民の生活財の分類と家の存続観—華城市東灘面防橋3里の異郷暮らし経験者C家を事例に—」中央大学大学院民俗学科物質文化専攻修士論文].
- 姜正遠 2003 「민속학과 현대사회, 도시」 경희대 민속학연구소 『한국의 민속과 문화』 7 [「民俗学与现代社会、都市」慶熙大学校民俗学研究所『韓国の民俗と文化』7].
- 2006 「성탄절」 『한국세시풍속사전 겨울편』 서울: 국립민속박물관 [「聖誕節」『韓國歲時風俗事典 冬篇』ソウル: 国立民俗博物館].
- 郭健弘 2011 「일상 아카이브(Archives of everyday life) 로의 패러다임 전환을 위한 소론」 한국기록학회 『기록학 연구』 29 [「日常アーカイブ(Archives of everyday life) へのパラダイム転換に向けた小論」韓國記録学会『記録学研究』29].
- 国立民俗博物館編 1996 「국립민속박물관 50년사」 [「国立民俗博物館 50年史」].
- 金光億 1996 「총론」 『중국 길림성 한인동포의 생활문화』 서울: 국립민속박물관 [「総論」『中国吉林省韓人同胞の生活文化』ソウル: 国立民俗博物館].
- 金만태 2009 「'짜장면'의 토착화 요인과 문화적 의미」 『韓國民俗學』 50 [キム・マンテ「'チャジャンミョン'의 토착화의要因と文化的意味」韓國民俗学会『韓國民俗學』50].
- 金文謙 2013 「한국 유흥문화의 대전환과 그 의미—노래주점을 중심으로—」 『韓國民俗學』 57 [「韓国における遊興文化の大転換とその意味—カラオケ酒店を中心に—」韓國民俗学会『韓國民俗學』57].
- 金善豊他 1996 『한국민속학의 새로운 인식과 과제』 서울: 집문당 [「韓國民俗學の新しい認識と課題」ソウル: 集文堂].
- 金正미 2003 「아파트 주거문화의 실태와 변화—평촌 신도시 사례 연구—」 서울대학교 대학원 인류학과 인류학전공 석사논문 [キム・チョンミ「アパートの住居文化の実態と変化—坪村新都市の事例研究—」ソウル大学大学院人類学科人類学専攻修士論文].
- 金泰坤編著 1984 『韓國民俗學原論』 서울: 시인사 [「韓國民俗學原論」ソウル: 詩人社].
- 金鎬傑 2006 「들어가는말: 생활제의 정의와 김명호 씨택 생활제 조사」 『행정중심복합도시건설 예정지역 인류·민속분야 문화유산 지표조사보고서 충남 연기군 금남면 반곡리 김명호 씨택 생활제 조사보고서』 [「はじめに—生活財の定義と Kim Myong-ho 氏宅の生活財調査」『行政中心複合都市建設予定地域人類・民俗分野文化遺産地表調査報告書 忠南燕岐郡錦南面盤谷里 Kim Myong-ho 氏宅の生活財調査報告書』].
- 南根祐 2003 「'민속'의 근대, 탈근대의 민속학」 『韓國民俗學』 38 [「'民俗'의近代、脱近代の民俗學」韓國民俗学会『韓國民俗學』38].
- 文化体育觀光部 2012 『한국의 종교현황』 [「韓國の宗教現況」]
- 民俗学会編 1999 (1994) 『한국민속학의 이해』 서울: 문학아카데미 [「韓國民俗學の理解」ソウル: 文学アカデミー].
- 밀러, 다니엘 2014 「물질문화와 청바지 연구」 『청바지 Blue jeans』 국립민속박물관 [ミラー, ダニエル「物質文化とジーンズの研究」『ジーンズ Blue jeans』ソウル: 国立民俗博物館].
- 朴賢洙 2005 「생활의 기록과 역사를 보는 원근법」 20세기민중생활사연구단 편 『어제와 오늘: 한국민중 80인의 사진첩』 서울: 현실문화연구 [「生活の記録と歴史をみる遠近法」20世紀民衆生活史研究団編『昨日と今日—韓國

- 民衆 80 人のアルバム—』ソウル：現実文化研究] .
- 朴奂榮 2011 「도시민속 연구의 방법과 영역」『韓国民俗學』54 [「都市民俗研究の方法と領域」韓国民俗学会『韓国民俗学』54] .
- 沈晟輔 2011 「일상 아카이브즈를 통한 생활세계 연구의 가능성」명지대학교 국제한국학연구소『국제한국학연구』5 [「日常アーカイブズによる生活世界研究の可能性」明知大学校國際韓国学研究所『國際韓国学研究』5] .
- 廉元姬 2013 「크리스마스의 도입과 세시풍속화 과정에 대한 연구—개화기에서 일제강점기를 중심으로—」한국국학진흥원『국학연구』22 [「クリスマスの導入と歳時風俗化のプロセスに関する研究—開化期から日帝強占期を中心に—」韓國国学振興院『国学研究』22] .
- 尹澤林 2004 「해방 이후 한국 부역의 변화와 여성의 일—서울지역을 중심으로—」『가족과 문화』16:3 [「解放後韓国における台所の変化と女性の仕事—ソウル地域を中心に—」韓国家族学会『家族と文化』16:3] .
- 李健昱 2008 「도시민속조사에 대한 경험의 공유」『민속학연구』23 [「都市民俗調査の経験の共有」国立民俗博物館『民俗学研究』23] .
- 李洪泰 2013 「1970년대 한국 민속학의 민과 민속학—두 학술대회를 중심으로—」『韓國民俗學』57 [「1970年代韓国民俗学における『民』と民俗学—2つの學術大会を中心に—」韓国民俗学会『韓国民俗学』57] .
- _____ 2015 「(토론문) “민속문화의 해” 와 지역민속조사의 방향과 비전」『지역과 함께 한 국립민속박물관 10년, 성과와 반성』서울: 국립민속박물관 [「(討論文) “民俗文化の年” と地域民俗調査の方向とヴィジョン」『地域と共に過ごした国立民俗博物館 10年、成果と反省』ソウル: 国立民俗博物館] .
- 李丁宰 2015 「'지역민속문화의 해' 사업의 성과와 반성」『지역과 함께 한 국립민속박물관 10년, 성과와 반성』서울: 국립민속박물관 [「'地域民俗文化の年' 事業の成果と反省」『地域と共に過ごした国立民俗博物館 10年、成果と反省』ソウル: 国立民俗博物館] .
- 任章赫 2013 「1960년대의 민속학과 '민」『韓國民俗學』57 [「1960年代の民俗学と'民」韓国民俗学会『韓国民俗学』57] .
- 林在海 1996 「민속학의 새 영역과 방법으로서 도시민속학의 재인식」안동대민속학연구소『민속연구』6 [「民俗学の新しい領域と方法としての都市民俗学の再認識」安東大学校民俗学研究所『民俗研究』6] .
- _____ 2005 「20세기 민속학을 보는 '현재학' 논의의 비판적 인식」『남도민속연구』11 [「20世紀民俗学をみる '現在学' の議論への批判的認識」南道民俗学会『南道民俗研究』11] .
- _____ 2012 「페이스북 공동체의 소통 기능과 정치적 변혁성」『韓國民俗學』55 [「フェイスブック共同体のコミュニケーション機能と政治的変革性」韓国民俗学会『韓国民俗学』55] .
- _____ 2013 「스마트폰과 대중문화 현상의 문화유전자 인식」『남도민속연구』27 [「スマートフォンと大衆文化現象の文化遺伝子に関する認識」南道民俗学会『南道民俗研究』27] .
- 任眞嬉 2011 「일상 아카이브즈 구축방안」명지대학교 국제한국학연구소『국제한국학연구』5 [「日常アーカイブズの構築方法」明知大学校國際韓国学研究所『國際韓国学研究』5] .
- 全京秀 1990 「물상화된 문화와 문화비평의 민속지론: 민속지의 실천을 위한 서곡」『현상과 인식』14(3) [「物象化した文化と文化批評の民俗誌論—民俗誌の実践のための序曲—」韓國人文社会科学院『現象と認識』14:3] .
- 周永河 2001a 「경기 북부의 식생활」『경기민속지—IV의·식·주편—』경기: 경기박물관 [「京畿北部の食生活」『京畿民俗誌—IV衣·食·住篇—』京畿: 京畿道博物館] .
- _____ 2001b 「경기 동부의 식생활」『경기민속지—IV의·식·주편—』경기: 경기박물관 [「京畿東部の食生活」『京畿民俗誌—IV衣·食·住篇—』京畿: 京畿道博物館] .
- _____ 2006 「서울 생활민속 연구의 현황과 과제」서울역사박물관 편『도시역사문화』5 [「ソウルの生活民俗研究

의現狀と課題」ソウル歴史博物館『都市歴史文化』5〕.

_____ 2007 「두 가지의 민속학과 의식주 연구—한복·한식·한옥에서 복식·음식·주거로—」『민속학연구』20 [[二つの民俗学と衣食住の研究—韓服・韓食・韓屋から服飾・食・住居へ—] 国立民俗博物館『民俗学研究』20〕.

_____ 2008 「(토론문) 국립민속박물관의 지역 생활제 조사의 특징과 향후 과제」『2008 한국민속학자대회: 민속학과 무형문화유산의 보존과 전승』서울: 한국민속학술단체연합회·국립민속박물관 [[(討論文) 国立民俗博物館における地域生活財調査の特徴と今後の課題] 『2008 韓国民俗学者大会—民俗学と無形文化遺産の保存と伝承—] ソウル: 韓国民俗学術団体連合会·国立民俗博物館〕.

千鎮基 2002 「보고싶은 것과 보이고 싶은 것의 조화(調和)—『가까운 이웃나라 일본』전을 중심으로—」『가까운 이웃나라 일본—한국인의 일본문화 보기—』서울: 국립민속박물관 [[「見たい」と「見せたい」との調和—隣の国、日本』展を中心として—] 『2002 国際シンポジウム 隣の国、日本—韓国における日本文化の表象—] ソウル: 国立民俗博物館〕.

_____ 2007 「민속박물관과 현대생활자료」한국민속학회『韓國民俗學』45 [[「民俗博物館と現代生活資料」韓国民俗学会『韓国民俗学』45〕.

崔雲植他 1999 (1998) 『한국 민속학 개론』서울: 민속원 [[『韓國民俗學概論』ソウル: 民俗苑〕.

崔仁鶴他 2001 『한국민속학 새로 읽기』서울: 민속원 [[『韓國民俗學を読みなおす』ソウル: 民俗苑〕.

韓陽明 2015 「국립민속박물관의 민속지 작업에 관한 비평—제주·전북·경북·충남의 사례를 중심으로—」『지역과 함께 한 국립민속박물관 10년, 성과와 반성』서울: 국립민속박물관 [[「国立民俗博物館による民俗誌作成の作業に対する批評—済州・全北・慶北・忠南の事例を中心に—」『地域と共に過ごした国立民俗博物館10年、成果と反省』ソウル: 国立民俗博物館〕.

咸翰姬 2002 「부외의 현대화과정에서 나타나는 문화적 선택들」『정신문화연구』25-1 [[「台所の現代化過程にみられる文化的選択」韓國精神文化研究院『精神文化研究』25-1〕.

_____ 2008 「생활사 연구와 아카이브의 활용」경북대학교 영남문화연구원 편 『영남학』14 [[「生活史研究とアーカイブの活用」慶北大学校嶺南文化研究院『嶺南学』14〕.

許龍鎬 2015 「‘지역민속문화의 해’ 사업 내용의 비판적 분석」『지역과 함께 한 국립민속박물관 10년, 성과와 반성』서울: 국립민속박물관 [[「‘地域民俗文化の年’の事業内容に対する批判的分析』『地域と共に過ごした国立民俗博物館10年、成果と反省』ソウル: 国立民俗博物館〕.

定期刊行物 (韓国語)

※韓國国立民俗博物館刊行의民俗誌については表1を参照のこと.

国立民俗博物館 1994 『민속연보 1993』창간호.

_____ 1995 『민속연보 1994』2.

_____ 1996 『민속연보 1995』3.

_____ 1997 『민속연보 1996 개관 50 돌』4.

_____ 1998 『민속연보』5.

_____ 1999 『민속연보』6.

_____ 2000 『민속연보』7.

_____ 2001 『민속연보 2000』8.

_____ 2002 『민속연보 2001』9.

_____ 2003 『이전개관 10주년 민속연보 2002』10.

- _____ 2004 『민속연보 2003』 11.
 _____ 2005 『민속연보 2004』 12.
 _____ 2006 『민속연보 2005』 13.
 _____ 2006.11 『민속연보 2006』 14.
 _____ 2008 『민속연보 2007』 .
 _____ 2008 『요약본 민속연보 2007』 .
 _____ 2010 『민속연보 2009』 .
 _____ 2011 『민속연보 2010』 .
 _____ 2012 『민속연보 2011』 .
 _____ 2013 『민속연보 2012』 .
 _____ 2014a 『민속연보 2013』 .
 _____ 2015 『민속연보 2014』 .
 _____ 2014b 『2014년 주요업무계획 국민과 세계로 다가가는 열린박물관』 .

英語

- Miller, D. and Woodward, S. 2007. "Manifesto for a study of denim." *Social Anthropology* 15-3: 335-351.
 Monroe, Dan. 2005. "The Future of Ethnology Museums." Lecture at the National Folk Museum of Korea, April 26 [댄 먼로 「민족학박물관의 미래」] .

オンライン文書（アルファベット順）

- Coleman, Simon and Simpson, Bob. n.d. Glossary of Terms. Discover Anthropology. Available from: <<http://www.discoveranthropology.org.uk/>>. Accessed 11/13/2015.
 国立国語院（発行年不明）『標準国語大辞典』 <<http://stdweb2.korean.go.kr/main.jsp>>2015/11/18 アクセス。
 国立民俗博物館（発行年不明）『公式ウェブサイト 国立民俗博物館』 [<http://www.nfm.go.kr/index.nfm>] (2015/11/12 アクセス)。
 文玉杓（発行年不明）「연구과제 상세정보: 집과 가족의 문화와 역사」『한국연구재단 기초학문자료센터』 [<https://www.krm.or.kr/index.jsp>] (2015/11/26) アクセス [[研究課題詳細情報: 家と家族の文化と歴史』『韓国研究財団基礎学問資料センター』]。

表1 韓国国立民俗博物館刊行の民俗誌リスト

刊行年度	書名
1984	『国立民俗博物館叢書Ⅱ 蝸島の民俗—大里願堂祭篇—』
1985	『国立民俗博物館叢書Ⅲ 蝸島の民俗—喪・祭礼、葬制、民間医療、民謡、説話篇—』
1987	『民俗博物館叢書Ⅰ 蝸島の民俗—堂祭（鎮里及び食島）、家神信仰 歳時風俗、通過義礼篇—』
1996	『国立民俗博物館学術叢書 17 漁村民俗誌—京畿道・忠清南道編—』
2002	『国立民俗博物館学術叢書 33 慶南漁村の民俗誌』

2006	『行政中心複合都市建設予定地域人類・民俗分野文化遺産地表調査報告書 忠南燕岐郡錦南面盤谷里民俗誌』 『行政中心複合都市建設予定地域人類・民俗分野文化遺産地表調査報告書 忠南燕岐郡錦南面盤谷里 Kim Myong-ho 氏宅の生活財調査報告書』
2007	1 『2007 済州民俗文化の年 済州民俗調査報告書① 済州特別自治道西帰浦市安徳面徳修里民俗誌』 ① 『2007 済州民俗文化の年 Kim Sung-won 氏宅の生活財調査報告書』 2 『2007 済州民俗文化の年 済州民俗調査報告書② 済州特別自治道済州市旧左邑下道里民俗誌』
2008	3 『2008 全北民俗文化の年 民俗調査報告書/民俗誌 金堤市進鳳面深浦里深浦村落 ^{マウル} 埋立地―彼らがそこに暮らす理由―』 ② 『2008 全北民俗文化の年 民俗調査報告書/生活財 金堤市進鳳面深浦里深浦村落 ^{マウル} Kang Gong-jin と Kim Young-nam 夫婦のサルリムサリ』 4 『2008 全北民俗文化の年 民俗調査報告書/民俗誌 チェットウル ^{結に近しい野} 、山上で田畑を耕すマウル 一茂朱郡赤裳面北倉里内倉村落―』 ③ 『2008 全北民俗文化の年 民俗調査報告書/生活財 ^材 Omogi ^ネ 家のサルリムサリ―茂朱郡赤裳面北倉里内倉村落 ^{マウル} ―』 (5) 『都市民俗調査報告書 1 阿峴洞の人々のはなし―世の中に他人事ははない―』 (④) 『都市民俗調査報告書 2/生活財 Kim Jung-ho と Kim Bok-sun 夫婦のモノ語り―モノ、なじみ深い過去と不慣れな現在とをつなぐ―』 (6) 『都市民俗調査報告書 3 変化 共感 疎通』 (⑤) 『都市民俗調査報告書 4/貞陵 3 洞生活財 Kim Jung-gi・趙成福家のサルリムサリ』 ※インフォーマントとの問題のため、一般公開されていない。
2009	7 『慶北軍威郡岳溪面大栗里 ^{ハンバムマウル} 大栗村落―石垣と一緒だった岳林の地、大栗村落 ^{ハンバムマウル} ―』 ⑥ 『慶北軍威郡岳溪面大栗里 ^{ハンバムマウル} 大栗村落 ^{ユニシル} ―尹谷宅 ^{サルリムサリ} の生活用品―』 8 『慶北盈徳郡丑山面景汀 1 里景汀里 ^{ベッブルマウル} ―景汀、青い東海から生まれる―』 ⑦ 『慶北盈徳郡丑山面景汀 1 里景汀里 ^{ベッブルマウル} ―Yoo Young-choon と Kim soon-ja 夫婦のサルリムサリ―』
2010	9 『2010 忠南民俗文化の年 民俗調査報告書/民俗誌 月光の下で神仙の遊ぶ月河城 ^{マウル} 村落』 ⑧ 『2010 忠南民俗文化の年 民俗調査報告書/サルリムサリ Kim・ヨンドウ Kim・ヨンヒ ^{キム・ヨンドウ Kim・ヨンヒ} 金榮斗・金燕姫夫婦のサルリムサリ』 10 『2010 忠南民俗文化の年 民俗調査報告書/民俗誌 東西南北に開かれた道にそって恩山 1 里』 ⑨ 『2010 忠南民俗文化の年 民俗調査報告書/サルリムサリ Hwang In-young と Kim Hee-sun 夫婦のサルリムサリ』 (11) 『都市民俗調査報告書 5/民俗誌 蔚山達里達洞』 (⑩) 『都市民俗調査報告書 6/サルリムサリ 蔚山達洞 Yu Jeong-su と Park Eun-gyeong 家族のサルリムサリ―』

2011	12 『2011 全南民俗文化の年 民俗調査報告書/民俗誌 霊光郡法聖浦』
	⑪ 『2011 全南民俗文化の年 民俗調査報告書/サルリムサリ Oh Jeong-hwan 宅のサルリムサリ』
	13 『2011 全南民俗文化の年 民俗調査報告書/民俗誌 七里アンソク上 ^{マウル} 金村落』
	⑫ 『2011 全南民俗文化の年 民俗調査報告書/サルリムサリ Baek Gyun と Yun Yeong-nim 宅のサルリムサリ』
	<14> 『2011 全南民俗文化の年 都市民俗調査報告書 7/ 民俗誌 港町木浦儒達洞・萬戸洞』 <⑬> 『2011 全南民俗文化の年 都市民俗調査報告書 8/ サルリムサリ 木浦萬戸洞 Ari 家のサルリムサリ』
2012	15 『2012 忠北民俗文化の年 民俗調査報告書/民俗誌 屯栗、新しい明日に備える ^{マウル} 村落』
	⑭ 『2012 忠北民俗文化の年 民俗調査報告書/サルリムサリ Oh Jeong-gi と Ji Soon-ja 夫婦のサルリムサリ』
	16 『2012 忠北民俗文化の年 民俗調査報告書/民俗誌 舍乃里、お寺につながる ^{マウル} 村落』
	⑮ 『2012 忠北民俗文化の年 民俗調査報告書/サルリムサリ Park Nam-sik と Seo In-ok 夫婦のサルリムサリ』
	(17) 『都市民俗調査報告書 9/ 民俗誌 仁川チャイナタウン清館』
	(⑯) 『都市民俗調査報告書 10/ サルリムサリ Wang, Chao-lung と Kim Mi-ra 家族のサルリムサリ』
2013	18 『2013 慶南民俗文化の年 民俗誌 南海の宝石 ^{マウル} 勿巾村落』
	⑰ 『Cho Chang-nam と Kim Soon-jeom 夫婦のサルリムサリ』
	19 『2013 慶南民俗文化の年 民俗誌 櫓を漕いで行った栗旨、橋を渡って出会う』
	⑱ 『Seong Yun-yong と Kim Suk-ja 夫婦のサルリムサリ』
	<20> 『都市民俗調査報告書 11/ 民俗誌 造船所都市、巨濟』 <⑲> 『都市民俗調査報告書 12/ サルリムサリ ^{イ・スボム} 李秀範と Rosalie 家のサルリムサリ』
2014	21 『2014 江原民俗文化の年 民俗調査報告書/民俗誌 丹頂鶴の眠る ^{マウル} 民北村落、二吉里』 ※「民北村落」とは、「民間人出入統制線」の「北側」にある「村落」という意。
	⑳ 『2014 江原民俗文化の年 民俗調査報告書/サルリムサリ Kim Du-sik と Yun Jeong-suk 夫婦のサルリムサリ』
	22 『2014 江原民俗文化の年 民俗調査報告書/民俗誌 大きい島に守られた ^{マウル} 葛南村落』
	㉑ 『2014 江原民俗文化の年 民俗調査報告書/サルリムサリ Choi Byeong-rok と Jin Suk-hee 夫婦のサルリムサリ』
	<23> 『2014 都市民俗調査報告書 13/ 民俗誌 砂丘の上にてできた拠り所束草市青湖洞』
	<㉒> 『2014 都市民俗調査報告書 14/ サルリムサリ Choi Suk-jeong おばあさんのサルリムサリ』

注1. 地名・氏名の漢字は、確認できるものに限る。

注2. 海外を対象にした民俗誌や映像民俗誌などは含めない。

注3. 通し番号の内、「数字のみ」は「地域民俗誌」、「丸数字」は「サルリムサリ民俗誌」、「丸括弧付き」は地域民俗の年事業の対象地域（道）と関係のない「都市民俗誌」、「山括弧付き」は地域民俗の年事業と同対象地域で行われた「都市民俗誌」を表す。